お知らせ

「農業のもつ教育力」シンポジウムが開催される

標記のシンポジウムが、JA北海道中央会・北道新聞社の共催で、四月十四日、札幌市内の「かでる2・7」で開催された。これには当研究所も後援・協賛すると共に実行委員会に参画した。出席は、行政、教育、農業団体、JA、生協、ファームインなどの関係者及び農家、一般市民など全道から会場満杯の二百五十名におよんだ。

■　まず、実行委員長の黒柳俊雄氏（札幌大学教授・北大名誉教授）は、開会挨拶の中で、『最近の世相は、どちらを向いても殺伐とした状況が展開されている。価値観の多様化とともに、世代を問わず、気掛かりや迷いが生じているのが現状である。今や、この様な状況に対して新たな取り組みをしなければならない転換期を迎えている。都市と農村とが交流によって、共生・共栄をお互いに誓い合う中で、農の営みの中に見出されるもの、つまり「農業のもつ教育力」について考え、これの発現に向けて実践して行くことは、大変意義ある課題である』と述べた。

■　次いで、七戸長生氏（道地域農業研究所長）より「農業の教育力」と題して基調講演があった。内容は、『教育基本法成立から五十年、教育も農業も重大な局面にあるが、実はこの二つは本質的につながっている』として、古代ギリシャの教育から説き起こしフランス革命の基となったルソーの自然教育論、そしてわが国における二宮尊徳の分度・推譲などの農の哲学へと進め、哲学的に歴史を踏まえて農業と教育の関係を述べた。

さらに、『環境と食物そして私たちが人間性と言っている近代市民社会のモラル、この三つは農を通して自然から与えられた贈りものである』とした。また、農業の教育力と関連してフランスやドイツにおける市民農園やグリーンツーリズムとその歴史的背景に言及し、これらは「家族ぐるみ」で行うことに意義があるとした。

そして『二十一世紀に入って地球上では飢餓など色々な問題が起こるだろう。どうすればよいのか、熱帯雨林を伐っていることと日本の社会の経済発展とどう関わっているのかなどを考えると私たちは農の営みが教えた人類愛をもっと大きなスケールで考えて行かねばならない』と述べた。

■　課題発表は三名で、最初に、嘉田良平氏（京都大学農学部教授）より「第五次産業としての農業の価値を問う」と題する発表があった。嘉田氏は、従来の第一、二、三次産業の外に、「第四次産業＝健康産業」、そして「第五次産業＝教育・文化～心づくり、心を育むことに関わる産業」があるとする。農業にはその多面的な機能として「農業の教育力」があり、これは第五次産業として位置づける。「農業の教育力」を地域活性化にどう活かすかの具体例（ヒント）として、『①ファームイン、ファームスティなど、グリーンツーリズムの振興、②農業体験（市民農園、観光農園）、③野外での生物観察などの環境教育、④園芸療法、薬草、薬膳料理など、医療現場での活用、⑤農業（専門）教育に加えて、学校教育・生涯教育の場での有効活用』などを挙げた。

また、『今回は、農業と教育を語る日本で始めてのシンポジウムである。これを記念して、一つのネットワークが結成されたという位置づけで、皆さんが核となり、今後このテーマに取り組んで頂きたい。これは北海道から全国に発信する貴重なチャンスである』と期待を述べた。

■　次に、手塚郁恵氏（ホリスティック教育研究会代表・神奈川県）から「森と牧場のある学校」と題

▲基調講演の道地域農業研究所長　七戸 長生 氏

して、ホリスティック教育についての発表があった。ホリスティックとは、「多様性や調和を尊重する」という意味の言葉で、その教育とは、ホリスティックな人間観・世界観に基づく教育であるという。

手塚氏は、『学校に森をつくったり、教育に農業体験を取り入れたりすることは、大変意味あることだ。結果よりも、その体験そのものが学びの場となること、そのプロセスの中で人々が出会い、お互いに成長していくことにこそ、喜びがあり、感動がある。そこから、新しい教育活動の波が広がり、人々の新しい共同体が生まれていくことを願う』と述べた。

■　そして、関田　哲氏（農業小学校をつくる会代表幹事・神奈川県）より「草の根農業小学校」のめざすもの、と題する発表があった。「農業小学校をつくる会」では、九十六年春より「農業体験教室／草の根農業小学校」を開校。本年度は、滋賀県、三重県、兵庫県の三ケ所で取り組んでいる。

この「体験教室」では、三月から十一月までの間、ほぼ毎週の日曜日を利用して十数種類の野菜を作っている。ここでは、①種をまく（あるいは苗を植える）、②手を入れる（水やり、草取り、追肥など）、③収穫して食べるの三点をカリキュラムにしている。

また、同会では、都道府県知事の認可を得た六年制の学校法人としての「農業小学校」を九十九年春に開校させたいと活動を始めている。

■　最後に、杉江良之氏（北海道新聞社論説委員）の座長で、公開討論会が行われた。熱気溢れる雰囲気の中で、活発な質疑応答、意見開陳がなされ、農業のもつ教育力への関心の強さがうかがえた。

なお、この催しについての記録（報告書）は別途作成するとともに、今後継続的な実践につながる体制づくりを実行委員において、検討する予定となっている。

（文責・池川）

掲示板

研究会・研修会等への報告者・講師の派遣

（平成九年三月～九年五月）

○まくべつ農村アカデミー研修
主　催　幕別町
と　き　平成9年3月12日
テーマ　「農地問題と地域農業」
講演者　七戸　長生（当研究所・所長）

○北海道農業土木協会・講演会
主　催　北海道農業土木協会
と　き　平成9年4月8日
テーマ　「農業農村が育む人間性」
講演者　七戸　長生（当研究所・所長）

○「農業のもつ教育力」シンポジウム・基調講演
主　催　「農業のもつ教育力」シンポジウム実行委員会
と　き　平成9年4月14日
テーマ　「農業の教育力」ー農業農村が育む人間性ー
講演者　七戸　長生（当研究所・所長）

○まくべつ農村アカデミー入校式・講演
主　催　幕別町
と　き　平成9年4月17日
テーマ　「今、農業・農村に何が必要か」
講演者　七戸　長生（当研究所・所長）

編集後記

窓のサッシを取り替え、外壁の化粧直しを終えて地域農研もさわやかに新しい年度を迎えました。長年この機関誌の編集を担当された土屋さん、そして中川さんが退職され、替わって池川さんが、（社）北海道米麦改良協会から来られました。内部でも多少の異動があり、幸研究部長が研究参与になり、替わって佐伯研究次長が研究部長に昇格しました。私、斉藤勝雄が今回の25号から編集を担当します、よろしくお願いいたします。

毎号表紙を飾る季節の農作業風景の写真選びに苦労しています。1眼レフのカメラを買って腕試しに水芭蕉の写真でもと隣の植物園に出かけましたが開園はゴールデンウイークからと言うことで最初からめげています。読者の方で気に入った力作を応募いただけたら幸いです。これが私の最初のお願いになります。

地域農研では、来る5月19日(月)共済サロンで第7回通常総会と午後2時より記念講演「北海道農業・農村振興条例への期待」（北大・太田原教授）を予定しています。たくさんの方のご来場をお待ちしています。

DATA FILE

関連事項／DATA

ホクレン農業協同組合連合会
〒060-91 札幌市中央区北4条西1丁目
☎011(231)2111

北海道立中央農業試験場
〒069-13 夕張郡長沼町東6線北15号
☎01238(9)2001

北海道新聞社
〒060-91 札幌市中央区大通西3丁目6
☎011(210)5600

室蘭工業大学
〒050 室蘭市水元町27番1号
☎0143(47)3133

白老町役場
〒059-09 白老郡白老町大町1-1-1
☎0144(82)2121

白老町農業協同組合
〒059-09 白老郡白老町本町1-7-4
☎0144(82)2266

東北農業試験場
〒020-01 盛岡市下厨川字赤平4番地
☎0196(41)2145

米山町役場
〒987-03 宮城県登米郡米山町西野字的場181
☎0220(55)2111